

## (九) 二度目の出産

二度目の発情、種つけ、出産も無事に済んだ。

今回の出産は家の前の空き地で、女房と一緒に、近所の医者志望の女子中学生が一部始終をしっかりと見届けた。

山羊は異様な叫び声をあげてから、しばらくは立ったり座ったりし、やがて再び一声、二声叫ぶたびに、天を仰いで震える舌が見える。痛いのだ。そして叫びながら力んでいる様子がよくわかる。見ているこっちもなんだか力が入ってくる。

お、仔山羊の足先が見えた。

が、ひっこみ、そして今度は鼻先と両足先の蹄（ひづめ）がハッキリ見え、またひっこみ、その次には頭と胴体までがウン、ウン、と押し出される。

全身が出てきたと思うと、地面まで 30 センチかそこらあるのに、ポトンと落ちた。「産み落とす」という言葉は比喻ではないのだ。

ビショ濡れの仔山羊を母山羊は舐（な）め続け、そしてもう一踏ん張りして、もう 1 匹をポトリ。やれ御苦労さま。

可愛いかわいい真っ白なフワフワ仔山羊を、例によって女房と亭主は毎日のように抱きかかえる。

しばらく抱いていると、仔山羊が一人前に肩を上下させてフウ、とため息をつく。とても可愛らしく、そしてなんともいえず可笑（おか）しい。

抱かれているたび、フウ、とため息をつくので、女房、なぜだろうと考えた。

たぶん、仔山羊が人間に対面して縦抱っこされている姿勢では、人間からは仔山羊の顔が見えて都合がいいけれども、本人（本山羊？）にしてみれば前かがみの不自然な姿勢で、肺に充分に空気が入らない。で、肺を膨らますための肩の上下とため息ではなかろうか、と動物学者になった気分で女房は解明する。仔山羊が抱かれるのを嫌うわけだ。

こうして観察と推測を重ねた結果、仔山羊を抱きかかえる時には「縦抱っこ」ではなく、胴体が横のままの「横抱っこ」だとため息をつかないことが判明した。

科学的だ、と女房はひとり得意がって鼻の穴を膨らます。

生後1週間、檻の中に親子3匹閉じこめている間は、家族一同仔山羊を抱き放題だが、檻の近くに母山羊をつなぐと、さあ仔山羊は逃げ回る。

そこで女房はまた考えた。

「山羊は高いところが好きだよ」と山羊を飼った経験のある数人が女房に告げた  
が、確かに青森からリンゴ屋さんが売りに来た時の、昔懐し頑丈なリンゴ箱をあ  
たりに置いておくと、必ず母山羊は上にあがってご機嫌である。ということは、た  
ぶん仔山羊も好きだ。

大当たり。

2匹が駆け回り回るコースの中にリンゴ箱を置いておくと、蹄の音を立てて上り、  
あたりをしばし睥睨（へいげい）し、また降りて駆ける。時に登りそこねてころげ  
落ちるのもご愛嬌。

その箱へ女房は座った。天気の良い日で、仔山羊はしばらく寄りつかないが、跳  
ね回るのを見ているだけでも楽しい。通りすがりの近所の人も、みな笑顔になる。

「可愛いねえ！」

「可愛いっしょう！」

「昔はウチにもいたんだがねえ」

「ハハハ、皆さんそうおっしゃいます」

「ウチにいたのは緬羊（めんよう）ってねえ、毛を取るやつだよ。冬の終わりに  
毛を刈ってね、それを糸に梳（す）いて染めてもらって、母親がわたしら姉妹のセ  
ーター編んでくれたよ」

「アイヤ、正真正銘の自家製セーター」

「んだよ、もののない時代だったから嬉しかったねえ」

その話を、もの好きな女房が神輿（みこし）を担いだ地元の夏祭りの後の宴会です  
ると、「オリ（俺）はよお、ウチの緬羊の毛で初めての背広つくってもらったのよ」  
というじい様がいた。

「ヘエエ、戦前の話？」

「オイ、バカにするなって。オリは戦後の生まれだよ、おねえちゃん」

そいつは失礼しましたと謝りながら、女房も、その話を聞いた亭主も、生まれ育った山口県では緬羊までは聞いたことがない、茨城県の中央部はやっぱり昔からずいぶん田舎だったんだねえ、と話したものである。後でわかったが、このじい様が戦後生まれというのはその場の大ウソだった。

「それにしても、緬羊という山羊の種類がいるんだねえ」

首をひねる女房に亭主は吹き出した。

「緬羊ってのは羊だよ」

「え？ やっぱり？ なんかおかしいって思った。でも、どうして羊って言わないの？」

「どうしてだろうねえ」

その後女房が仕事がらみで調べた時には、未（いま）だに獣医関連の公文書では「羊」と書かず「緬羊」だった。

女房がリンゴ箱に腰かけていると、仔山羊がおずおず寄ってくる。「太郎」と名づけられた雄と「花」と名づけられた雌を比べると、太郎のほうが一回り大きい。子鬼の角のようなデッパリ2つも、太郎だけ。デッパリは、だんだん大きくなってほんものの角になる。女房の傍に最初によってくるのは必ず太郎。

リンゴ箱の真ん中あたりは女房の60キロ強の体重を支えるのに多少の不安があるので、女房は隅っこに座る。手を出すと仔山羊はサッと逃げる。知らん顔して座っていると、カタッと音がして仔山羊が1匹女房の横に乗った。ここぞとばかりに捕まえて、そのまま膝の上に抱きかかえていると、この姿勢は苦しくないらしい。じっとおさまって、おや、まぶたが閉じてるよ、寝てしまった。

この小さな、温かな、柔らかな、心臓がとくとく打つ生き物。

なんともいえない、貴重なもの。